

尋常小學唱歌

第二學年用

文部省

K1307
2
2



緒 言

- 一、本書ハ本省内ニ設置セル小學校唱歌教科書編纂委員ヲシテ編纂セシメタルモノナリ。
- 二、本書ノ歌詞中、尋常小學讀本所載以外ノモノニ就キテハ、修身・國語・歴史・地理・理科・實業等諸種ノ方面ニ涉リテ適當ナル題材ヲ求メ、文體用語等ハ成ルベク讀本ト歩調ヲ一ニセンコトヲ期セリ。
- 三、本書ノ曲譜ハ排列上其ノ程度ニ就キテ多少難易ノ順ヲ追ハザルモノナキニアラズ、是其ノ歌詞ノ性質上已ムヲ得ザルニ出デタルナリ。

明治四十四年六月

文 部 省

目 次

一 櫻	2	一一 案山子	24
二 二宮金次郎	4	一二 富士山	26
三 よく學びよく遊べ	6	一三 仁田四郎	28
四 雲雀	8	一四 紅葉	30
五 小馬	10	一五 天皇陛下	32
六 田植	12	一六 時計の歌	34
七 雨	14	一七 雪	36
八 蟬	16	一八 梅に鶯	38
九 蛙と蜘蛛	18	一九 母の心	40
一〇 浦島太郎	20	二〇 那須與一	44

目次

櫻

♩=112

一カスミニツヅクハハナノクモ
 ニむかふのーやまのはやまざくら

ノヤマニツモルハハナノユキ
 こちらのをかのはやへざくら

ハールノシグツツハウツクシヤ
 やーへもひとへもうつくしや

ドチラムイテモハナバカリ
 はなはこのはなさくらばな

一、櫻

霞につづくは花の雲

野山につもるは花の雪

春の四月はうつくしや

どちら向いても花ばかり

三向ふの山のは山櫻

こちらの岡のは八重櫻

八重も一重もうつくしや

花はこの花 櫻花

二 二宮金次郎

一、柴刈り繩なひ草鞋をつくり、

親の手を助け弟を世話し、

兄弟仲よく孝行つくす、

手本は二宮金次郎、

二、骨身を惜まず仕事をはげみ、

夜なべ済まして手習讀書、

せはしい中にも撓まず學ぶ、

手本は二宮金次郎、

三、家業大事に費をけぶき、

少しの物をも粗末にせず、

遂には身を立て人をもすくふ、

手本は二宮金次郎、

二宮金次郎

♩=100

二宮金次郎

一 二 三

シバカ バネダ カミフ リを一 ナをダ ハシイ ナマジ ヒすニ ワしッ ラゴヒ デとエ ラをラ ツはハ クげブ リみキ

オよス 一 コ ヤナシ ノベノ テすモ ラまノ スシヲ ケてモ オてン トなマ トラツ ラひニ セとセ ワくズ シよニ

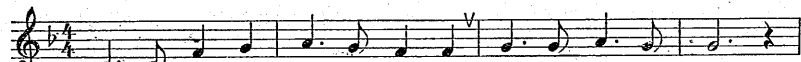
キヤセツ ウはヒ ダしニ イいハ ナなミ ガカラ ヨにタ クもテ カたヒ ウゆト カまラ ウすモ ツます クなク スホフ

四

テ ホ ン ハ ニ ノ ミ ヤ キ ン シ ラ ウ 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一

♩=108

よく遊びよく遊べ



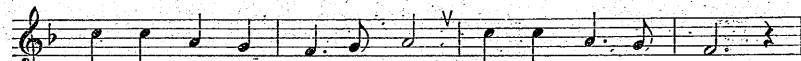
ニツクエノマヘデハイツシンニ
ニくわけふがすんだらいつしんに



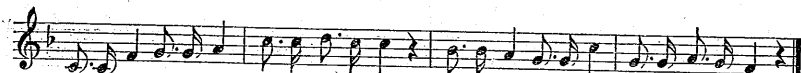
ナニモオモハズヨクマナベ
なにもわすれずよくあそべ



アソビナガラノベシキウハ
たどおもしろくあそぶのが



ジカンヲムダニスルバカリ
げんきを無駄にするよいくすり



マナベマナベイツシンニ
あそべあそべいつしんに

三 よく遊びよく遊べ

一 机の前では一心に

何も思はずよく學べ。

遊びながらの勉強は

時間を無駄にするばかり。

學へ學へ一心に。

學へ學へ一心に。

二 課業が済んだら一心に

何も忘れてよく遊べ。

ただ面白く遊ぶのが

元氣をつけるよい薬。

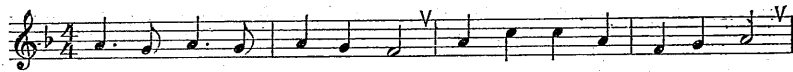
遊べ遊べ一心に。

遊べ遊べ一心に。

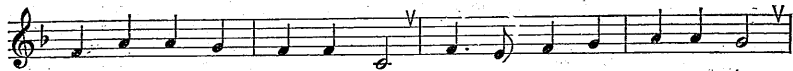
雲 雀

♩=132

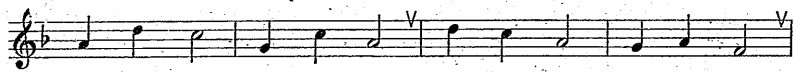
雲 雀



一 ビ イ ビ イ ビ イ ト サ ヘ ツ ル ヒ バ リ
ニ ビ い び い び い と さ ヘ づ る ひ ば り

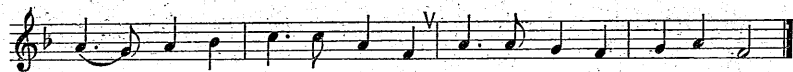


サ ヘ ツ リ ナ ガ ラ ド コ マ デ ア ガ ル
さ ヘ づ り や ん で と こ ら ヘ お ち た



タ カ イ タ カ イ ク モ ノ ウ ヘ カ
あ を い あ を い む ぎ の な か か

八



コ エ ハ キ コ エ テ ミ エ ナ イ ヒ バ リ
す が た か く れ て み え な い ひ ば り

四 雲 雀

雲 雀

九

一 びい〜とさへづる雲雀、

囀りながら何處まであがる、

高い高い雲の上か、

聲は聞えて見えない雲雀。

二 びい〜とさへづる雲雀、

囀りやんで何處らへ落ちた、

青い青い麥の中か。

姿かくれて見えない雲雀。

五、小馬

一、はいしいはいしい あゆめよ小馬

山でも坂でも ずんずん歩め

お前が進めば わたしも進む

歩めよ歩めよ、 足音たかく

二、ばか〜〜〜 走れよ小馬

けれども急いで つまづくまいぞ

お前が轉べば わたしも轉ぶ

走れよ走れよ、 轉ばぬ様に

(尋常小學校本卷三所載)

小馬

♩=112

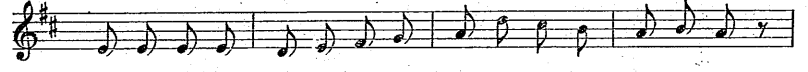
小馬



一 ハイ シイ ハイ シイ アユメヨ コウマ
ニ ばか ばか ばか ばか はしれよ ころま



ヤマデモ サカデモ ズンズン アユメ
けれども いそいで つまづく まいぞ



オマヘガ スニメバ ワタシモ ススム
おまへが ころべば わたしも ころぶ

一〇

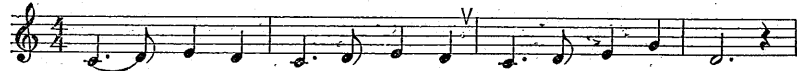


アユメヨ アユメヨ アシオト タカク
はしれよ はしれよ ころばぬ やうに

田 植

♩=120

田
植



一 シーロイ スゲ ガサ アカダ スキ
ニ うーる て さ き も あ し ど り も



ソ ー ロ ヒ ス ガ タ ノ サ フ ト メ ガ
ふ ー し も そ ろ へ て さ を と め が

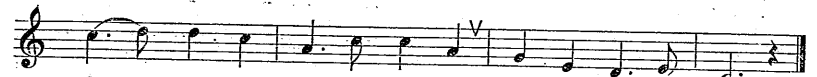


ウ ー タ フ タ ヲ エ ノ ウ タ キ ケ バ
う ー た ふ た う る の う た き け ば

二



ソ ロ ウ タ ソ ロ タ ヨ サ フ ト メ ガ ソ ロ タ
こ と し は ほ う ね ん ほ に ほ が ー さ い て



イ ー ネ ノ デ ホ ヨ リ ナ ホ ソ ロ
み ー も の こ さ も こ め が な る

田
植

六 田 植

一、白しろい 菅すげ笠かさ赤あかだすき、

揃そろひ 姿すがたの 早はや少せう女にょが

歌うたふ 田た植うゑの 歌うたき け ば、

揃そろう た 揃そろ た よ 早はや少せう女にょが 揃そろ た、

稻いねの 出い穂ほより なほ 揃そろ た。

二、うゑる 手て先さきも 足あし取とり

節ふしも 揃そろ へ て 早はや少せう女にょが

歌うたふ 田た植うゑの 歌うたき け ば、

今ことし年としは 豊あゆ年ひん穂ねに 穂ほが さい て、

路みちの 小こ草くさも 米こめが なる。

七雨

一、降れく雨よ都の雨よ。

馬や車の往來絶えぬ

町の埃のしづまる程に、

雨よ降れ降れ程よく降れ。

二、降れく雨よ田舎の雨よ。

茄子や胡瓜の花咲き揃ふ

畠の土のうるほふ程に、

雨よ降れ降れ程よく降れ。

雨

♩=126

雨

一 フレフレ アメヨ ミヤコノアメヨ
二 ふれふれ あめよ ゐなかのあめよ

ウマヤクルマノワウライ タエヌ
なすやきうりのはなさきそろふ

マーチノホコリノシヅマルホドニ
はたけのつちのうるほふほどに

アメヨ フレフレ ホドヨクフレ
— — — — — — — —

蟬

♩ = 96

一カミナリ一ガ トホクナール
 ニゆふだも一が ひとしき一り

フクトモナシニカゼガフク
 みどりのはかーら つゆがちーる

キトイフ一キニハセミガナク
 すすしい一こゑでせみがなく

八、蟬

一、かみなりが遠く鳴る。
 吹くともなしに風が吹く。
 木といふ木には蟬が鳴く。
 二、夕立がひとしきり。
 みどりの葉から露がちる。
 涼しい聲で蟬が鳴く。

九 蛙と蜘蛛

一、しだれ柳しだれやなぎに 飛び着つく蛙かえる、

飛とんで 落おちて 飛とび、

落おちても 落おちても また 飛とぶ程ほどに、

とうく柳やなぎに 飛とび着ついた。

二、風かぜ吹ふく小枝こえだに 巣すを張はる小蜘蛛こぐも。

張はつては きれ 張はり、

きれても きれでも また 張はる程ほどに、

とうく小枝こえだに 巣すを張はつた。

(尋常小學校本巻三所載)

蛙 と 蜘蛛

♩=80

一 シ ダ レ ヤ ナ ギ ニ ト ビ ッ ク カ ヘ ル
 ニ か せ ふ く こ え だ に す を は る こ ぐ も

ト ン デ ハ オ チ オ チ ハ ト ビ
 は つ て は き れ き れ て は ほ り

オ チ テ モ オ チ テ モ マ タ ト ブ ホ ド ニ
 き れ て も き れ て も ま た は る ほ ど に

ト ッ ト ク ヤ ナ ギ ニ ト ビ ツ イ タ
 と う と う こ え だ に す を は つ た

浦島太郎

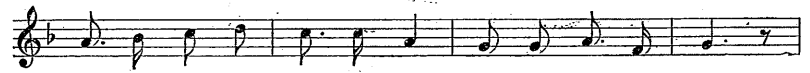
♩=100



一	ム	カ	シ	ム	カ	シ	ウ	ラ	シ	マ	ハ
二	オ	ト	ヒ	サ	マ	ノ	ジ	チ	ソ	ラ	ニ
三	ア	ソ	メ	ア	キ	テ	ギ	ガ	ツ	イ	テ
四	カ	ヘ	ニ	ミ	レ	バ	キ	ハ	イ	カ	ニ
五	コ	コ	ツ	ホ	ン	サ	コ	タ	ト	レ	バ



一	タ	ス	ケ	タ	カ	メ	ニ	ツ	レ	ラ	レ	テ
二	タ	ー	ヒ	ヤ	ヒ	ら	の	ま	ヒ	を	ド	リ
三	オ	イ	ト	マ	ゴ	一	め	ん	こ	ソ	コ	ニ
四	モ	と	の	た	い	ハ	ヒ	む	ら	も	ナ	ク
五	ア	一	ケ	テ	ク	ヤ	モ	タ	マ	テ	バ	コ



一	リ	ウ	グ	ウ	ジャ	ウ	ヘ	キ	テ	ミ	レ	バ
二	ユ	ダ	メ	ヅ	ラ	ブル	ク	オ	モ	シ	ノ	ハ
三	タ	一	へ	ル	ト	に	ウ	タ	ノ	シ	ミ	ハ
四	カ	一	ち	ラ	ト	ラ	ノ	ヒ	ト	ビ	ト	は
五	ミ	カ	カ	ラ	ユ	バ	ム	シ	ロ	ケ	ム	は



一	エ	一	ニ	モ	カ	ケ	ナ	イ	ウ	ツ	ク	シ	サ
二	ツ	キ	ヒ	の	た	ツ	も	一	ウ	メ	の	ラ	ち
三	ミ	ヤ	グ	ニ	モ	ラ	ッ	タ	ウ	マ	テ	バ	コ
四	カ	ー	は	も	シ	ラ	な	ハ	ウ	の	ば	カ	リ
五	タ	チ	マ	チ	タ	ラ	ウ	ハ	ウ	ヂ	イ	サ	ン

一〇、浦島太郎

一、昔々浦島は

助けた龜に連れられて
龍宮城へ来て見れば、

繪にもかけない美しさ。

二、乙姫様の御馳走に、

鯛や比目魚の舞踊、

たゞ珍しく面白く、

月日のたつも夢の中。

三、遊びにあきて気がついて、

お暇乞もそこくくに

歸る途中の樂は、

土産に貰った玉手箱。

四、歸つて見ればこは如何に、

元居た家も村も無く、

路に行きあふ人々は

顔も知らない者ばかり。

五、心細さに蓋とれば、

あけて悔しき玉手箱、

中からばつと白煙、

たちまち太郎はお爺さん。

一、案山子

二、山田の中の一本足の案山子、

天氣のよいのに蓑笠を着けて、

朝から晩までたゞ立ちどほし。

歩けないのか山田の案山子。

三、山田の中の一本足の案山子、

弓矢で威してかんで居れど、

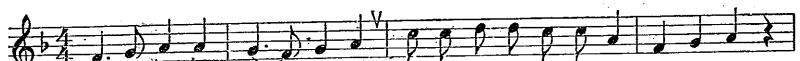
山では鳥がかあかと笑ふ。

耳が無いのか山田の案山子。

案 山 子

♩=112

案山子



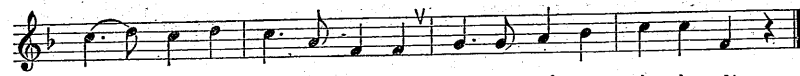
一 ヤマダノ ナーカノ イツボンアシノ カカシ
ニ やまだの なーかの いつぼんあしのかかし



テンキノ ヨイノニ ミノカサツケテ
ゆみやで おどして りきんで をれど



アサカラ バンマデ タダタチ ドホシ
やまでは からすが かあかと わらふ



アールケ ナイノカ ヤマダノ カカシ
みーみが ないの か やまだの かかし

三四

♩ = 96

富士山

一 ア タ マ フ ク モー ノ ヲ ヘ ニ ダー シ
 ニ あ を ぞ ら た か く そ び え た ち
 シ ハ ヲ ノ ヤ マ ラ ミ オ ロ シ テ
 か ら だ に ゆ き の き も の き て
 カ ミ ナ リ サ マ フ シ タ ニ キ ク
 か す む の す そ を と ほ く ひ く
 フ ジ ハ ニ ツ ボ ン イ チ ノ ヤ マ

一、富士山

あたまを雲の上に出し、

四方の山を見おろして、

かみなりさまを下に聞く、

富士は日本一の山、

二、青空高くそびえ立ち、

からだに雪の着物着て、

霞のすそを遠く曳く、

富士は日本一の山、

(総持小学館本巻四所収)

一三 仁田四郎

一、手負の猪 牙くひそらし、

地を蹴り木を折り 草靡かせて、

此方をめざして 山駈け下る。

二、大將頼朝 あれ爲留めよと

いふ聲待たずに 仁田の四郎、

猪めがけて 馬駈け寄せる。

三、馬からひらりと 身を躍らせて、

背中へ飛乗り 脇差抜いて、

四、裾野にひかへた 幾千人が、

一度にやんやと 四郎を譽めた、

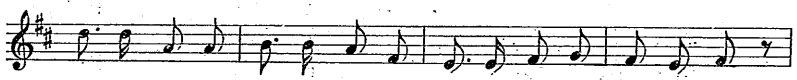
富士の山さへ 崩れるほどに。

仁田四郎

♩=100



一 テ オ ヒ ノ キ ノ シ シ キ バ ク ヒ ヲ ラ シ
二 た い し や う よ り と も あ れ し と め よ と
三 ウ マ カ ラ ヒ ラ カ リ ト ミ ヲ ド ラ セ ン
四 す そ の に ひ か へ た い く せ ん に



チ フ ケ リ キ マ マ リ ク サ ナ ビ カ セ テ
い ふ こ り ま た す に に た ん の し ら い
せ ナ カ へ に や びん ノ や し ら ら を シ ヲ ほ め
ち ナ ど に や ん や と し せ ば



コ ナ タ マ ズ シ テ ヤ マ カ ケ ク ダ ル
ゐ の し し し め が し け て ゃ ま か け く せ し
コ ブ シ シ の ト ホ マ レ ト ヘ イ ツ サ ヲ ム ン
ム ブ シ シ の ト ホ マ レ ト ヘ イ ツ サ ヲ ム ン

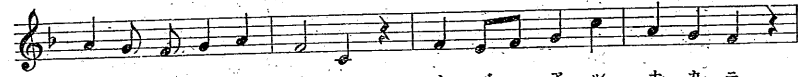
紅葉

♩=92

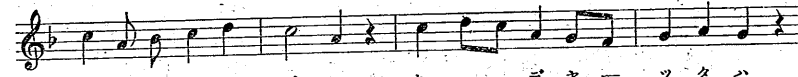
紅葉



アキノユフヒニ テルヤマモミダニ
二たにのながれに ちりうくもみち



コイモウスイモ カズアルナカニ
なみにゆられて はなれでよつて



マツヲイロドル カヘデヤツタハ
あかやきいろのいろさまざまに



ヤマノフモトノ スンモヤウ
みづのうへにも おるにしき

三〇三

紅葉

一四 紅葉

一、秋の夕日に照る山紅葉

濃いも薄いも数ある中に、

松をいろどる楓や葛は

山のふもとの裾模様

二、溪の流に散り浮く紅葉

波にゆられて離れて寄つて、

赤や黄色の色様々に、

水の上にも織る錦

三二

天皇陛下

♩=96

カ ミ ト ア フ ギ タ テ マ ツ リ

オ ヤ ト モ ア フ ギ タ テ マ ツ ル

テ ノ ウ ヘ イ カ ノ オ ン タ メ ナ ラ バ

ワ ガ ミ モ イ ヘ モ ワ ス レ テ

注意 仰ぎはあおぎと發音すべし。

天皇陛下の御爲ならば、
わが身も家も忘れて。

神と仰ぎ奉り、
親とも仰ぎ奉る。

一五 天皇陛下

一六 時計の歌

一、時計は朝から かつちんかつちん。

おんなじ響で 動いて居れども、

ちつともおんなじ 所を指さずに、

晩までかうして かつちんかつちん。

二、時計は晩でも かつちんかつちん。

我等が寐床で 休んで居る間も、

ちつとも休まず 息をもつがずに、

朝までかうして かつちんかつちん。

(歌常小學讀本卷四所載)

時計の歌

♩=92

一 ト ケイ ハ ア サ カ ラ カ ッ チ ン カ ッ チ ン
 二 と けい は ば ん で も か つ ち ん か つ ち ん

オ ン ナ ジ ヒ ビ キ デ ウ ゴ イ テ フ レ ド モ
 わ れ ら が ね ど こ で や す ん で を る ま も

チ ッ ト モ オ ン ナ ジ ト コ ロ フ サ サ ズ ニ
 ち つ と も や す ま す い き を も つ が す に

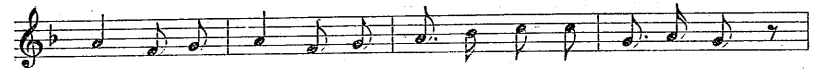
パ ン マ デ カ ウ シ テ カ ッ チ ン カ ッ チ ン
 あ さ ま で か う し て か つ ち ん か つ ち ん

雪

♩=92



一 ユーキヤコンコ アラレヤコンコ
二 ゆーきやこんこ あられやこんこ



フツテハフツテハズンズンツモル
ふつてもふつてもまだふりやまぬ



ヤーマモノハラモフタバウシカブリ
いぬはよろこびにはかけまはり



カレキノコラズハナガサク
ねこはこたつでまるくなる

三六

一七 雪

一、雪やこんこ霰やこんこ。

降つては降つてはすんく積る。

山も野原も綿帽子かぶり、

枯木残らず花が咲く。

二、雪やこんこ霰やこんこ。

降つても降つてもまだ降りやまぬ。

犬は喜び庭駆けまはり、

猫は火燵で丸くなる。

一八 梅に鶯

一、日のよくあたる庭前の

垣根の梅が咲いてから、

毎朝来ては鶯が

かけいい聲でホウホケキヨウ。

二、鳴くのを聞いて縁側の

籠の中でも鶯が、

垣根の方を眺めては、

調子を合せてホウホケキヨウ。

梅に鶯

♩=100

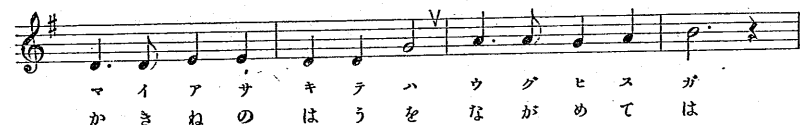
梅に鶯



一 ヒノヨクアタルニハサキノ
二 なくのをきいてえんがはの

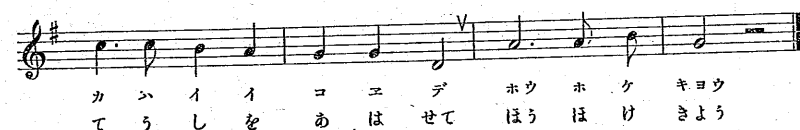


カキネノウメガサイテカラ
かーごのなかでもうぐひすが



マイアサキテハウグヒスガ
かきねのはうをながめては

三八

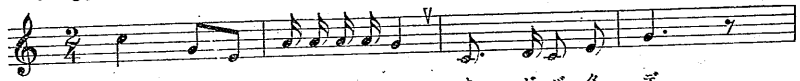


カハイイコエデホウホケキヨウ
てうしをあはせてほうほけきよう

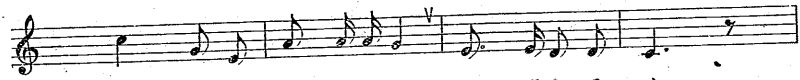
母の心

♩=80

母
の
心

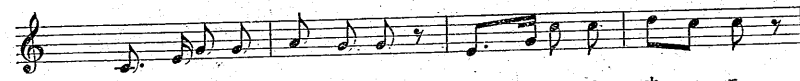


一 ア サ ハヤクカラ キ ドバタ デ
二 よ る おそくまで おくのまに



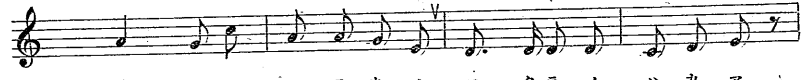
ハ ハハセ イダス ア ラヒモノ
は ははせ いたす はりしごと

四〇



タ ラヒノ ナカニ アルバ ナーニ
ひ ぎのうへには なーにが あーる

母
の
心

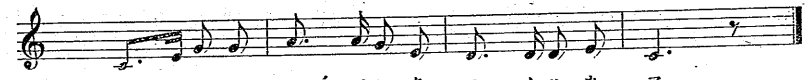


コ レハ タラウノ コクラノ ハカマ
こ れは おはるの はれぎの はおり



タラウ キ ノフハ ウンドウクワイデ
おはる あしたは ひなさままつり

四一



ドーロニヨゴシタコノハカマ
きーせてやりたいこのはれぎ

一九 母の心

一、朝早くから 井戸ばたで、

母はせい出す 洗ひ物。

たらひの中に あるは何

これは太郎の 小倉の袴。

太郎昨日は 運動會で、

泥によごした この 袴。

二、夜遅くまで 奥の間に、

母はせい出す 針仕事。

ひざの上には 何がある。

これはお春の 晴着の羽織。

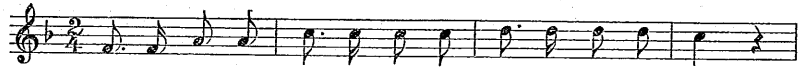
お春明日は 雛様祭。

着せてやりたい この晴着。

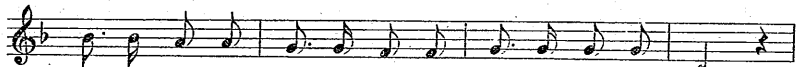
那 須 與 一

♩=88

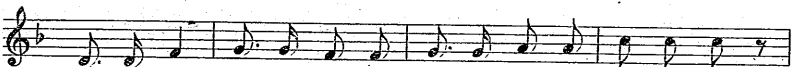
那須與一



一 ゲン ベ イ ショウ ブ ノ ハ レ ノ バ ショ
ニ あ ふ ぎ は ゆ ふ ひ に き ら め き て

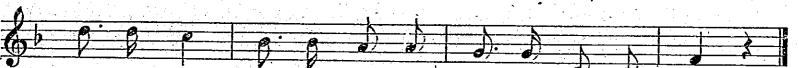


ブ ッ ン ハ コ ノ ヤ ニ サ ダ マ ル ト
ひ ら ひ ら お ち ゆ く な み の う へ



ナ ス ノ ヨ イ チ ハ イ ツ シ ン フ ラ ン
な す の よ い ち の ほ ま れ は い ま も

四四



ネ ラ ヒ サ グ ネ タ ヒ ヨ ウ ト イ ル
や し ま の う ら に 一 な り ひ び く

那須與一

四五

二〇、那須與一

一、源平勝負の晴の場所、

武運はこの矢に定まると、

那須の與一は一心不乱、

ねらひ定めてひようと射る。

二、扇は夕日にきらめきて

ひらく落ちゆく波の上、

那須の與一の譽は今も、

屋島の浦に鳴りひびく。



發行所

總發售所
東京市日本橋區新右衛門町十六番地

印刷所

株式會社
東京地酒版製造所
東京市京橋區築地二丁目十七番地

印刷者

野村宗十郎
東京市京橋區築地三丁目十一番地

不許複製

發行者

代表者 大橋新太郎
株式會社
總發售所
東京市日本橋區新右衛門町十六番地

著作權者

文部省

明治四十四年六月廿八日發行
明治四十四年六月廿五日印刷

定價金五錢
尋常小學唱歌第二學年用

K130,7-2-2

